

Echokardiographie :

Mit einem Beitrag von J. Kentel

Echokardiographie im Kindesalter

S. Effert., P. Hanrath und W. Bleifeld

Springer Verlag, 1979

最近、医学の診断技術の上でもっとも急激に進歩したものに超音波法がある。循環器学においても超音波法は欠かすことのできない検査法となっており、今日では、X線検査、心電図につぐ第3の検査法としての地位を築いており、一般病院、家庭医のレベルまで広く普及しつつある。

本書は超音波法の中のMモードによる心エコー法(UCG)について、初心者や学生にも分るように平易に書かれた解説書であり、心エコー図の実際の取り方、心エコー図の所見の見方を多数の図表、写真を中心に説明している。著者の中のEffertは心エコー法についての草分け的研究者の1人であり、20年以上に及ぶその経験は本書の到る所に滲み出ている。心エコー図の強調する部分を色刷りにした方式は大変分り易く感心させられたが、おそらく氏の教育上の経験に基づくものであろう。また、副題にあるごとく小児の心エコー法についても紙面の少なからぬ1部をさいて丁寧に解説しているのも本書の特徴の一つである。

本書は大別して、超音波の物理、装置などを解説した基礎部、心エコー法による心構造診断、心機能診断、小児の心エコー法の四つの部分に分かれるが、最大の特徴は75枚という豊富な2色刷りの心エコー図をもとにした心構造の診断であり、十分に紙面をさき、疾患別にその心エコー図所見を実際の症例図を中心に簡明に説明しており、ドイツ語の不得意な人でも容易に読み進むことが可能である。また、僧帽弁逸脱症候群、心筋症、心房腫瘍、心房血栓、人工弁のエコー所見など、超音波法の出現によりにわかにはクローズアップされた今日的問題も種々な角度から取り上げられており、読み倦むことがなかった。

心エコー図による心機能診断については、左室収縮力の指標としてのさまざまな心エコー図上のパラメーターが述べられており、これらの左室計測値が左室造影図などの観血法から測定される心機能とよく相関していることが書かれている。また、心エコー法へのコンピューター応用のための1章が設けられており、左室径、中隔厚、後壁厚、Vcfの時間的経過をコンピューターを使って表わしたり、左室圧曲線を記録し、左室径一圧曲線を作り、それを左心機能の分析に使用するなど多くの利用法が述べられており、将来の心エコー法の一つの発展方向を示すものとして注目された。

小児の心エコー法は先天性心疾患について、ASDやVSDのように頻度の多いものからかなり稀な疾患まで、心エコー図を中心に解説しているが、とくに、コントラスト・エコー法の重要性を強調しており、共感した。

この種の心エコー図の解説書はこれまで、欧米、日本で多くの本が発行され、いささかマンネリズム化しているが、本書は、従来の同程度の厚さの本に比べ、症例や心エコー図の写真も豊富であり、エコー図中の重要部分を色刷りにした方式も大変分り易く好ましく感じられたが、心エコー図を重視したためか、参考記録としての心電図、心音図、脈波曲線があまりきれいに記録されていなかったのが残念であった。また、最近流行の超音波断層法についてもほとんど触れられていないのも不満である。

以上、読後の印象としては145ページという比較的薄い本ではあるが、良くまとまっており、心エコー法の必要事項はもれなく記載されている感じであり、心エコー法の最も新しく発行された解説書として御一読をおすすめしたい。

(増田善昭)

[千葉医学 57, 41, 1981]